

二期生18名が旅立ち、新たに17名が入学しました

平成30年3月23日、宇都宮大学教職大学院二期生18名に学位記が授与されました。大学院修了を前にした3月2日には成果発表会を実施し、2年間の学びのまとめを行いました。2年間の成果をそれぞれの職場で存分に発揮してくれることを期待しています。

また、4月には四期生17名が新たに入学しました。

【成果発表会】

教職大学院では、自分たちの活動や学びを省察し、実践へと結びつけていくことを重視しており、毎週金曜日に行われている「リフレクション」が授業科目の中でも根幹を成すものとして位置づけられています。3月2日(金)には、今年度修了を迎える2年生に、2年間の教職大学院での生活で積み重ねてきた省察をもとに教職大学院での学びを振り返ってもらい、さらに1年生へのアドバイスも含めて語ってもらう機会として、成果発表会を開催しました。リフレクションの集大成の場です。

成果発表会では一人一人の発表時間を十分に確保し、全員で発表者の語りを聞きます。大学院で学び始めた当初の戸惑い、学校で実習を行う前に抱えていた不安、実習校の先生方と関係を築いていく過程、それによって変化していく自分自身など、2年間の学びについてさまざまな視点からの振り返りが語られました。教育実践フォーラムでは、チームごとの発表だったため、教職大学院の院生・教員全員が会するこの成果発表会は貴重な機会となっています。

また、学んだ成果を今後どのように生かしていきたいかについても、院生がそれぞれ決意を語ってくれました。この成果発表会が、修了生にとって、教職大学院での学びを今後に生かしていくための大きなステップとなればと思っています。

【学位記授与式】



3月23日、宇都宮市文化会館大ホールで、平成29年度宇都宮大学学位記授与式が行われました。その後、大

学の教職大学院の教室で、松本専攻長より一人一人に学位記が手渡されました。修了後、現職院生は、元の所属校、あるいは異動先で新たな一步を踏み出すことになり、そして学卒院生は教員としての生活のスタートを切ります。

宇都宮大学教職大学院では、「ホームカミングデー」等を通じて修了生とも密接なつながりを保ち続けています。教職大学院での学びが、学校現場にどのように還元されるのかについても、検証し、教職大学院の教員としての省察も深めていきたいと思っています。

【入学式】



4月4日、宇都宮市文化会館大ホールで、平成30年度宇都宮大学入学式が行われました。現職院生にとっては「学生として」の久しぶりの入学式となりました。子どもたちを迎える入学式ではなく、自分自身が学生として迎えらる入学式は新鮮な体験となったことと思います。石田学長の式辞の中には、「専門分野を深めることは当然として、それ以外の幅広い学問に触れる」、「本当の知は実践との表裏でなければならない」といった言葉もあり、入学式から教職大学院の学びのあり方に触れることができたのではないかと思います。4月9日には、大学院のガイダンスが行われ、4月10日からいよいよ授業もスタートしました。

教職大学院での学びは容易には答えの出ないものです。今年度も、新たなメンバーとともに答えの出ない学びの旅に出発したいと思います。

(文責:司城紀代美)

「教科等横断的な視点」 教育実践高度化専攻教授 青柳 宏

例えば、小学校6年の国語のある教科書には谷川俊太郎の詩「生きる」が載せられています。その一連目。「生きているということ／いま生きているということ／それはのどがかわくということ／木もれ陽がまぶしいということ。／ふっと或るメロディを思い出すということ／くしゃみすること／あなたと手をつなぐこと」。「生きる」は全部で五連ありますが、全てを読むと、その読む人自身が、生きているということ、とても深い次元で、納得し、また同時に新しい目で世界を見つめ直すことが出来るのではないかと思います。

ところでまた、小学校6年生の理科では、「人や動物の体」という単元で、人の体の中の、特に心臓、肺、胃、小腸、大腸等々の内臓の働き、また血液の「循環」ということを学びます。血液を送り出すポンプである心臓の大切さ等々。これらを学ぶ子ども達は、きっと自然に、心臓の上に手を重ね、また「肝臓ってここにあるのかな」と手を重ねるでしょう。「生きているということ」を改めて実感し、自分の体が生きてくれている(きた)ことに、感謝の思いを抱くのではないのでしょうか。

「生きている」ということを、国語科で、詩の律動を通して学ぶこと。同時に、理科で、各臓器の働きと血液の循環という視点から学ぶこと。このようにまず、教師自身が、私達の体や周囲の世界を、例えば、国語科を通して、理科を通して、横断的に捉え直すこと。それはとても新鮮な体験です。しかしまた教師は、その新鮮な体験が、子ども達にとってはどうか、また同時に、各教科の本質をおろそかにしていないか、と問う必要があります。難しいことですが、このような一人一人の教師の「新鮮な体験」と「問い直し」こそが、教科等横断的な視点からのカリキュラムの創造を、教師同士で協働的に取り組んでいくための出発点になると思います。

《シリーズ:院生の声 ①》

変 化

本を読むって楽しいな

4月9日に教職大学院新入生歓迎会も終わり、平成30年度の教職大学院が本格的にスタートを切った。歓迎会の席で、4期生の方々と話をしながら、昨年の自分が期待と不安の入り混じった日々を過ごしていたことを思い出した。その中で4期生の方に「教職大学院に来て一番変わったと感じたことは何ですか?」と尋ねられた。学びの見取り方?授業の展開の仕方?職員集団の中での意識?どれも変わったと感ずることであるが、尋ねられた答えにはふさわしくないように感じた。答えを考えながら、「教職大学院では清流を流れる石のように徐々に角が取れて変化していく」という言葉を思い出した。

今もなお、現在進行形で起こっていて、少しずつではあるが確実に変化している、そんなことが自分自身に起こっている。今まで意識してこなかった自分の中の、深い、深い部分の変化。

もしこんな変化に興味のある方は、「そうだ、教職大学院に行こう」。

※尊敬する2期生の先輩方の金言を一部引用させていただきます。(2年 湯澤 浩之)



恥ずかししながら、読書は大切だと思いつつも、読書に対して前向きになったのはここ最近のことです。「本を読むって楽しいな」と思うことの繰り返しが、そうさせてくれました。最近の私にとっての「本を読むって楽しいな」と思える瞬間は、本について、文章から感じたことについて、フランクに語り合っている時です。そんな瞬間を提供してくれる仲間や環境に、大いに感謝です。

先日、『もし文豪たちがカップ焼きそばの作り方を書いたら』という本を読みました。同じ内容(カップ焼きそばの作り方)を様々な文体を模倣して綴っているだけの本です。本当に、それだけ。しかし、「だけ」というのは語弊があります。文豪たちが独自の文体という個性を築き上げたこと、そして本書の作者がその個性を確実に捉えているということに強い感銘を受け、ここでこの本を取り上げるに至ったといえます。作者は「この本は軽く読んでからははと笑って、ページを閉じた瞬間にすべてを忘れるような本を目指して書かれた。」と語っていますので、ここで取り上げることは本望ではないかもしれませんが、この本で見つけた新たな「本を読むって楽しいな」について、少しだけ書いてみようと思います。

それは、「らしさ」を感じながら文章を読むということです。綴られている内容も然ることながら、作家は言葉の選び方や並べ方に、非常に慎重であり、その中で独自の文体が確立されていることを、改めて意識させられました。作品に対して心地よさや違和感を抱くのは、文体を含めて作品を読み味わうということが無意識に行われているからこそそのもの……。文体という作家のこだわりを意識することも、読書の楽しみ方の一つだと感じました。後々は国語の教師として、「本を読むって楽しいな」を提供できるようになりたいです。そのために、まずは自分自身がたくさん感じることを、本好きの子どもを育てる一歩としたいと思います。(2年 田村 光)

《編集・発行》宇都宮大学大学院 教育学研究科 教育実践高度化専攻 (教職大学院)

〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町350番地 Tel: 028-649-5242

<http://www.edu.utsunomiya-u.ac.jp/koudoka/index.html>

◇教職大学院Facebook: <https://www.facebook.com/uuptnet> ※院生が編集し、教員が管理しているFacebookです。

